

今回の「Healthy Concierge プロの人・匠の人」は、一般社団法人日本医療コーディネーター協会（JPMCA）代表理事、医療法人社団ユメイン（Humane）副院長であられる嵯峨崎泰子先生を訪ねた。「具合が悪いと感じたら、多くの人は病院の外来に行きますよね。本来、外来では、いろんな話をし、その中で一番問題になっていく事から解決して欲しいんですが、現状、全体的に話を聞いてくれたりする人や場所が少ないと思います。そうすると、内科なのか外科なのか、患者さん自身が受診する科を判断して決めなければいけない状態が多くなります。患者さんには専門知識がない事が多いので、適切な科を選択していかない可能性もあります。適切な科でない、患者さんにとって後々、きちんとした治療をされているのだろうか？と違和感や不安を感じてしまう事に繋がります。実際に、そういった違和感を感じて、ご相談に来られる方も多いのですが、よく話を聞いてみると、根源は別のところにあたりするんです。つまり、本来解決したい問題ではないところを解決している、違和感や不安を覚えているんですね。そういったことを無くすために、

きちんと患者さんの話を聞き、本来解決したい問題を明らかにして、適切な治療をする科、医師、医療機関を繋げるというのが医療コーディネーターの役割です」と語る嵯峨崎先生。  
外来で相談した上で適切な科を紹介して欲しいと思うのですが、看護師さんも忙しそうだったり、受付が機械の場合もあったりと、また、受診中に不安や違和感を感じても言い出せない気持ちもある、なかなか難しい問題かもしれないと感じてしまう。「そういったことを身近で解決してくれるのが、地元のかかりつけ医です。街の小さな診療所が総合的に診てくれて、専門機関との調整をすることが大切だと感じています。もちろん、最近はWEBも普及し、患者さんも情報収集できますし、専門機関にWEBを通じて相談できることもあります。私が医療コーディネーターの活動を始めたのが16年前。当時と比べたらITの発達で、患者さんが救われる機会が多くなっていると思います。その反面、人と接する事が減った為に、情報がひとり歩きしてしまい、逆に悩む患者さんも多いと感じています。患者さんひとりひとり、身体つきや症状、生活背景も違い

きちんと患者さんの話を聞き、適切な治療に繋げる

# 医療コーディネーター

本来解決したい問題を  
明らかにして、  
受診中の不安や違和感を  
なくすことが大事です。



嵯峨崎 泰子（さがさき・やすこ）

各科臨床看護師を経て医療専門商社勤務。その間、米国の医療センターで研修を受ける。1995年自身のがん治療をきっかけに、医療コーディネーターとして活動を始める。2003年に中間法人日本医療コーディネーター協会を設立。主な著書に『生命と医療にかける橋』（生活ジャーナル）、『あなたのがん治療本当に大丈夫？』（共著・三省堂）など。



すので、人が介在しないと、人の問題は解決できない部分が多いと思うんです。身近なところでなんでも相談できるかかりつけ医は心強い存在です。お医者さんでなくても、医療機関でも良いのです」

かかりつけ医の大切さを感じるが、実際、かかりつけ医がいない、探し方がわからない場合、どうしても良いのかアドヴァイス頂いた。「かかりつけ医と言っても一人の医師だけでなくとも良く、通院している病院、自分の記録が継続して残っている病院が、かかりつけ医、かかりつけ医療機関だという考え方で良いと思います。誰が見ても〇〇さんはこういう人なんだという事が客観的にわかるものがあるというのが大事なんです。かかりつけ医、かかりつけ医療機関がない、という方には、健康診断を行うことを勧めています。人間ドックなど大掛かりなものでも、自治会がやっている医療検診などで医師とコミュニケーションし、自分に合いそうか判断するのも、かかりつけ医を探す一つの方法です。一方で、患者さんが困っている事を語り尽くせば、そんなに誤解は生まれないと思うんです。しかし、遠慮してしまったり、様々な状況も重なり、語り尽くす

人が介在しないと、  
人の問題は解決できない部分が多いと思うんです。



ことができないこともあるかと思っています。ですが、自分の状況をしっかりと伝えることはとても大切なことです。患者さんが自分の状況を伝える為に勧めているのが、いつからどのような症状かメモを取る事。そのメモを病院で渡し、今、何で困っているかを明確に伝えるのどが痛い、胸が痛いんだけど胸のどの辺がどのように痛いのかという事を、細かくメモする事が基本です。口で説明するのではなく、

メモにする事で、簡潔に要点をしっかりと伝えられるんです。メモを渡すだけでも、医師と患者さんのコミュニケーションで誤解が少なくなります。また、お薬手帳や母子手帳の管理も「自己カルテ」の「環境です」とも語る嵯峨崎さん。  
かかりつけ医、かかりつけ医療機関を持つことの大切さはもちろん、良く話す事、伝える事、コミュニケーションの大切さに改めて気づかされた訪問となった。